



第 29 回（平成 20 年 9 月 10 日）定例会の研究発表要旨

## 山口運河って何？ 日本一甘いカボチャの話！

手稲郷土史研究会会員 加藤 利昭 氏

普段何気なく過ごしているが、各地域には あれ！ と思う様な歴史があるものです。

今回は、山口運河と日本一甘いカボチャの話などについて、加藤さんに熱弁を振るってもらった。

### 1. 山口運河について

山口運河は、小樽市銭函町の海岸に注ぎ、北に向かい新川に落ちている。延長で 6.5 キロの排水路である。この排水路は、明治 27 年に国費を投じて造られた。山口地区は泥炭層と砂地のため重要な排水路とされていた。当時の工事は第 4 代北海道庁長官北垣国道が当たり、難関工事のもと明治 30 年に竣工している。

山口運河は、明治時代に人力で造った、唯一運河の名称がついた人工の川である。小樽市銭函から星置 — 山口 — 発寒 — 茨戸 — 篠路を經由して、創成川を経て札幌まで約 8 時間かけて、物資を運んでいた。一時は、舟運にも活用されたが 5 年ほどで終わっている。物資は海産物、農産物やマキなどが運ばれていた。

山口運河の掘削経費は 75,677 円 39 銭 2 厘で、長さは 804 間と言われている。こうした大金を投じた割には、利用する者が少なく、交通運輸の点においてはその効用は殆ど皆無状態だったと言われている。

#### \* 現在の認識

- ・ 所在地 札幌市手稲区（花畔・銭函間／茨戸・札幌間）
- ・ 規模 延長 1.5 キロ

なお、近年はこの運河周辺の大規模開発等により、埋め立てられ消滅の兆候が顕になってきている。そこで、地元 3 連合町内会で共通の地域に根づいたまつり「手稲山口運河まつり」として、山口運河の歴史的史実に思いをはせ、後世に伝えるため運河まつりを毎年実施している。

### 2. 日本一甘いカボチャの話

手稲山口の名産品には、山口スイカ（サッポロすいか）と大浜みやこカボチャがある。

山口スイカは自家用として栽培されたのが大正初期である。販売用として栽培されたのが大正 5 年から 7 年頃に「平佐京一」さんが作付けした。

出荷は銭函の魚場や札幌の八百屋であったが、昭和 4 年には札幌市の円山朝市（北 1 西 24）に出荷された。

ただスイカは冷害に弱いために代替の作物が検討されて、昭和 55 年「大浜みやこカボチャ」が誕生した。

味は言わせる人にすれば、日本一甘い味だと力説している。出荷も東京の築地市場に出され、大変評判が良く、直ぐに品切れになるとのことである。

とにかく一度食べたら病み付きになるほどとのこと、是非一度食べてみては如何ですか！

[文責：上仙]

### 次回例会のお知らせ

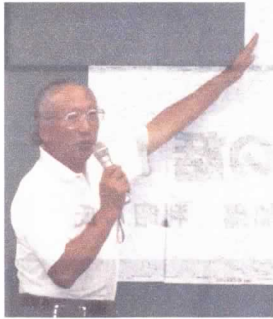
今回は日程を変更して、11月15日(土)に行います。

11月は、文化月間ということで、手稲区(地域振興課)と共催で、講師に榎本洋介氏(文化資料室 前札幌市史編纂員)を招いて開催します。



## 手稲に住んだ死刑囚 藤井ナツ

手稲郷土史研究会副会長 一ノ宮 博昭 氏



藤井ナツとは何者か、“その資料”によれば、明治 40 年頃、函館から小樽へ、そして手稲に住みつけた祈禱師で、祈禱所を手稲山の登山口付近に構え、医者から見放された病人が、坂を上ってナツにさすって貰うと、霊験あらたか、皆元気になって、坂を小躍りして帰ったという。

ところが或る日、サーベルを下げた警官がナツ宅に踏み込んで連れ去り、苗穂刑務所へ。裁判で死刑を言い渡され、そして執行された。ナツの罪は何か。それは、医者資格も無いのに“モルヒネ”を乱用して、函館で 4 人も殺めた、という罪状。モルヒネは麻薬だから、病人も一時的に鎮痛作用で痛みが薄らいただけというカラクリ。ナツが住んでいたのは、当時の手稲村の一角だが、奇特な人もいるもので、ナツの近くに住む宮崎宗右衛門という人が、遺体を引き取り、懇ろに埋葬したいと申し出、初め法務当局はこれを一蹴したが、再三の陳情で「そこまでいうなら、荒ナワを十字に掛ける墓標をつくれ」という条件で許され、宮崎さんは村人と共に手厚く葬ったという。その荒ナワ姿の墓標は確認できないが、あるとすれば多分「手稲墓地」の一隅ではないか？ 信憑性を問われると困るが、ナツについては、ちょっとした猟奇事件なので、当時の小樽新聞が「おナツ物語」として連載した、ということも“その資料”に載っている。

【筆者注】お話の筋は以上。最後の住処が手稲であった死刑囚藤井ナツの顛末を例によって、巧みな話術で例会を魅了したが、この話は、ご本人が昭和 46～7 年頃裁判所担当記者で、折にふれ書き留めた部厚い覚え書きの中の一枚で、“その資料”は何であったか不明ということですが、現役バリバリの記者が、不確かなことをメモする筈もなく、輪郭にボヤけたところがあるにせよ、ナツの人生と運命が手稲の地に凝縮された一駒は、間違いなく手稲史の 1 頁なのだと思います。

（文責：國井）

## 「近隣市町村の史跡視察・調査ツアー」紀行

手稲郷土史研究会会員 條野 雄一

区民センターを出発、バスは道々 44 号線を石狩に向かった。車中では茂内会員の説明、車窓には、手稲から続く前田農場、極東農場、町村農場旧跡を眺め、紅葉山砂丘上に建つ了恵寺に着いた。住職の高木憲了氏の話しと、宝蔵館を見学し、風防林に送られ生振に入った。伊澤会員の昔話。バスは札幌大橋を渡り、河畔に建つ本庄陸男の碑に迎えられ当別町へ入った。ロイズふと美工場前の本庄陸男生誕の地の前で当別町教育委員会の坂田資宏さんの話し。小説「石狩川」のモデルとして岩出山伊達家主従が大自らのなか幾多の困難と度重なる冷害水害に苦しめられ、固い団結により乗り越えた話しを聞き、甘いチョコレートの香りに誘われて売店の中に引き込まれた ……。

菓子を手に伊達記念館、伊達別館へ。館内には、古文書、書簡などが展示され、当別神社には伊達邦直が祀られ、開拓の苦勞が伝えられていた ……。

朝からの強行軍で、お腹はペコペコ。田西会館にて昼食をとる。食後腹消化しを兼ね、駅前「ふれあい倉庫」で地元野菜などを買い、バスへ。車中では野村会員より町村農場の概要説明を聞き、篠津にある町村農場前を車窓より見学。バスは旧町村農場へ到着。全日本モデル酪農をめざし「土づくり、草づくり、牛づくり、人づくり」と町村敬貴の酪農の夢を大きく花開いた地であった。その後、現在の地で新たな循環型酪農の先駆者として全国より注目され、多くの研究生を受け入れていると云うすばらしい農場を勉強させて頂きました。

時間に追われるまま、石狩川と千歳川の合流点にある江別河川防災ステーションを見学、石狩川を運航していた川船。亡母が娘時代、江別港より船に乗って石狩へ海水浴に行った、と云う話を思い出しました。

帰路は一ノ宮会員の柔かい話しを聞きながら、4 時過ぎに区役所に到着。本日の研修は内容が多く、頭の中では消化不良気味であった。

研修に御協力いただいたバスの運転手さん、研修先の皆様、そして陰で支えて下さった方に感謝致します。

